

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 12 日現在

機関番号：17104

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520253

研究課題名(和文) 19世紀イギリス文学における詩人像の変遷とキャリア形成

研究課題名(英文) The Changing Poet Figure and Career Establishment in the Nineteenth Century English Literature

研究代表者

虹林 慶(Nijibayashi, Kei)

九州工業大学・工学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：40315164

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀のイギリス詩における詩人像形成はロマン派から始まり、ヴィクトリア朝において熟成する。この経過、すなわちロマン派が作り上げた詩人像あるいは詩想をどのようにヴィクトリア朝文人が継承、消化し変化させたのかを、両時代の文人を比較対照することによって浮き彫りにした。具体的には、ロマン派詩想からの影響を、ヴィクトリア朝詩人(テニソン、ブラウニング、スウィンバーン、ロセッティ)とヴィクトリア朝散文家(モリス、ラスキン)において考察した。その中で、キャリア形成なども含む、文人のアイデンティティ形成がどのように作風の確立を通して行われたかを、個々のケースにおいて論証した。

研究成果の概要(英文)：The sacred image of poets/writers in the nineteenth century starts with the Romantics and eventually finds its point of compromise with social situation in the Victorian era. In this study, the process of this changing image has been investigated and argued by comparing Romantic thinking by some major Romantic poets with Victorian adaptation of it. The comparison is applied to several individual cases in order to discover not only a common trait but also different attitudes among Victorians in inheriting, digesting and incorporating Romantic poetics. The comparative study covers Tennyson, Browning, Swinburne, Dante Rossetti, Morris and Ruskin. In each case, I have argued how their identification as a poet/writer was established as reflected in the establishment of their career and their style, through their confrontation, compromise and cooperation with Romantic influence.

研究分野：英文学

キーワード：ロマン派 ヴィクトリア朝詩 テニソン ブラウニング スウィンバーン ロセッティ モリス ラス
キン

1. 研究開始当初の背景

本研究課題を始めるきっかけは、ロマン主義文学の再評価を巡り、アプローチに関して提案を行うことであった。すなわち、個々の文人についての、あるいは個別の批評理論による細分化されたロマン主義文学研究は広範に行われている一方、次の二つの視点を合わせ持ったアプローチはあまり盛んではない状況である。一つには、ロマン主義文学の後世の文人に対するインパクトを研究すること、もう一つはそれらを個別ではなく、一つの有機的なまとまりとして俯瞰的にとらえることである。両者を踏まえた研究は、数が少なく、またその多くが書籍としてまとめられた選集であり、別個の研究を束ねたものである。このようなことから、一人の視点で複数のヴィクトリア朝文人へのロマン派の影響を考察するという、本研究課題の意義が十分にあると考えた次第である。さらに大局的な見方をすれば、ロマン主義文学を少し離れて眺め、間テキストの要素や文学史の要素を加えることで、その解釈や理解に違った光を当てることができる可能性があると考えた。このような研究スタイルは一般的ではなく、また時間と労力を要する。従って5年間のスパンを一つの最小限度必要な期間と考えた。

大局的にロマン主義文学を捉える試みにおいて、次の狙いもあった。すなわち、文学研究自体が一時期の隆盛を失っている現在、包括的にロマン主義文学のダイナミズムを扱うことで、文学を巡る議論を間接的に活発化することに繋がるのではないかという点である。また、ロマン主義文学という視点をヴィクトリア朝文学に向けることで、ヴィクトリア朝文学の捉え方についても、再考を促す効果があるだろう。まとめると、様々な文人を取り込んだ、複数の時代にまたがるアプローチは、英文学研究をさらに大きな枠組みのなかで研究していく方向性に促す一助となると考えた。ロマン主義文学の文学史上の影響については、必ず受容と拒絶の両面がある。本研究はこれを捉えつつ、同時になぜロマン主義文学が現代においても盛んであるかという理由についても考察するものである。以上のような背景があり、この研究課題を申請した次第である。

2. 研究の目的

(1) 同じ19世紀でありながら、文学においてロマン派の時代とヴィクトリア朝の時代とは質的にかかなりの変化を遂げている。特に詩人にとっての社会における役割の意識は、その変化を読み解く一つの鍵となる。それを詩人像形成あるいはキャリア形成という視点から読み解くのが本研究の目的であった。ヴィクトリア朝文人の対応の一つとして、ロマン派の詩からの影響を避けるという方向性を考えることができる。この中にはヴィク

トリア朝散文家の対応も含むことができるであろう。だがより興味深いケースは、ヴィクトリア朝詩人がどのようにロマン派の影響を抑えたかを考察することである。これは同時に、うまく自分の詩風を確立するためのプロセスを見ることもできる。以上のように、影響との葛藤をさまざまな詩人や文人において検証していくのが一つ目の目的であった。二つ目の目的は、ロマン派を受容し発展あるいは変化させたケースを考察することである。これは、うまく影響力を利用できた例ということができるであろう。

(2) 詩というジャンルを中心に扱うため、必然的にロマン派詩想とヴィクトリア朝詩想を比較対照することが主たる研究となった。(これ以外にも、ヴィクトリア朝散文家におけるロマン派の影響も行った。)ひとまず、ロマン派詩人の詩人像形成がどのようなものであったかを概観し、その詩人像がどのようにヴィクトリア朝詩人において受容、変容、あるいは拒絶されたかを考えた。ロマン派の詩人像はその理想主義と密接に結びついていたのに対して、ヴィクトリア朝詩人の悩みは、ロマン的理想主義の遺産と現実主義とをどう折衷をつけるのかというものであった。この詩人像形成における研究の目的は、文人ごとの異なる詩人像(詩風も)形成を対照させることである。つまり、一様ではないロマン派受容を、ロマン派の詩人像という論点を持つことで、ある程度明らかな流れとして捉えることである。

(3) 主要なヴィクトリア朝詩人としては、テニスン、ブラウニング、スウィンバーン、ロセッティを取り上げた。それぞれの詩人の特徴を明らかにしたうえで、それをロマン派のそれと対比させて、その文学的な達成内容について検討することを目的とした。(散文家としては、モリスとラスキンを取り扱った。)ロマン派からの遺産を回避、変質、発展させながら、これらの詩人がどのようなスタイルを確立したのか、そして、アイデンティティを獲得することができたのかを研究した。さらに、それぞれの詩人についての研究が、最終的にどのような詩人間の相関図を織り成し、総体としてロマン派文学が次世代に継承される際のどのようなダイナミズムを形成しているのかを示すことが最終的な目的であった。

3. 研究の方法

研究方法は第一次資料の分析と考察、第二次資料の考察を行い、これを研究成果(発表・論文)の形にまとめることで行った。これらの多くの文献は購入して用意する必要があった。なお、入手困難なものについては、他大学図書館での閲覧、相互利用の活用などで対処した。

(1) 第一次資料については、各ロマン派詩人とヴィクトリア朝詩人の代表的作品のり

ストアップを行った上で、それを購入し、読解、分析を行った。作品に加えて、伝記や手紙などの資料についても、同様の作業を行った。研究対象の作品のリストは「研究成果」に、その一部を載せている。

(2) 第二次資料は批評を中心としたものである。ロマン派のヴィクトリア朝文学への影響を扱ったものを中心に多くの図書を新たに購入する必要がある。研究と深い関係がある文献や資料については、考察を行い、論文に引用、参照文献としてのリストアップなどを行った。

(3) 論文での研究成果発表の際は、すべて英語で行ったため、英語の論文校閲の費用が発生した。

4. 研究成果

本研究課題における主な成果は、一つはほぼ計画通りの研究を行えたことであり、もう一つは研究の成果を発表するか、あるいは発表準備の状態に用意することができたことである。本課題は研究範囲が広範であるだけでなく、テーマも大きいので、研究活動に多大な時間と労力を要する。しかし、計画に挙げた詩人についての研究を終えることができたことで、今後、研究の総括を形にまとめることができる状態となったと考えている。この研究により、ロマン派詩とヴィクトリア朝詩の一つの流れ(断絶や変容ではなく)として捉える見方を形成するのに貢献できるのではないかと考える。

(1) ジョン・キーツのウィリアム・モリスにおける影響を考察し、それぞれの文人の創作活動期における作風の変化の類似について研究した。すなわち、前期について、キーツの *Lamia* と“*La Belle Dame sans Merci*”をモリスの *The Defence of Guenevere* と“*The Haystack in the Flood*”を比較研究し、さらに、ギリシャへの傾倒について、キーツの“*Ode on a Grecian Urn*”と *The Life and Death of Jason* における恋愛観について考察し、そこに個人的感情から社会連帯への興味の推移を確認した。最後にキーツの *Hyperion* および *The Fall of Hyperion* をモリスの後期ロマンズ群と比較することで、最終的に詩人の美意識が社会的役割への意識へと発展する様を明らかにした。(8番の論文となった。)

これとは別に、モリスの後期ロマンズ群がいかにロマン主義的な革命のモデルとして機能しているかを主要なロマンズ(*The Story of the Glittering Plain*, *The Water at the World's End*, *The Water of the Wondrous Isles*, *Child Christopher*, *The Wood beyond the World*, *The Sundering Flood*)を研究分析することで示した。ロマン派文学における個人の探求物語と共同体による革命の両方が、それぞれプロットの中に活かされていることを明らかにした。(7番の論文となった。)

(2) ロマン主義詩人達自身による詩人像形

成の研究。ロマン主義詩人は18世紀後半における詩人の危機を一つのきっかけとして、それぞれのキャリア形成ならびに詩人としてのアイデンティティ確立を目指した。このダイナミズムを、18世紀の不幸な詩人達のケース(特にチャタートンを中心に)に対するロマン派詩人の反応において考察し、さらに、それを踏まえた自身の未来像(死後も含む)を分析、研究した。中心的に扱ったのはキーツの手紙やシェリーの *Adonais* などである。最後に詩人の陥る可能性がある恐怖あるいは危機として「狂気」を扱い、*Julian and Maddalo* を中心に、それを乗り越えるどのような詩人像が詩的に創造できたのかを論じた。全体として、ヴィクトリア朝詩人達の詩人像形成に対する、ロマン派における典型の一つを表出した。(5, 6番の論文となった。)

(3) ブラウニングの初期作品におけるロマン主義文学の受容とその後の回避を、「劇的独白」というテクニクの成立を巡って考察した。作風の変化とロマン主義文学からの「影響の不安」を分析するために、以下の著作から主要なテキスト(*Dramatic Lyrics*, *Dramatic Romances and Lyrics*, *Men and Women*, *Dramatis Personae*, *Pauline*, *Paracelsus*, *Sordello*, *The Ring and the Book*)を選出して研究を行った。結論としてブラウニングの「劇的独白」は、ロマン主義文学の詩想を回避して、自身の作風を確立するための装置であったことを示す。ブラウニングの場合には、ロマン派の自伝的要素をうまく減らすことで複数のペルソナを身にまとう詩人像を確立することができた。(3, 4番の論文となった。)

(4) テニソンの作品について網羅的(*In Memoriam*, *The Princess*, *The Palace of Art*, *The Lotos-Eaters*, *The Lady of Shalott*, *Ulysses*, *The Two Voices*, *Idylls of the King*, *Maud*, *The Vision of Sin*, *Locksley Hall*, *Locksley Hall Sixty Years After*, *OEnone*, *St Simeon Stylites* など。)に分析、研究を行い、ロマン派からの影響について、特に『王女』における「幼年期」の描かれ方に焦点を絞った。ロマン派の発見した「幼年期の無垢」をテニスンがうまく自身の思想と時代の要請に合わせて変容しているかを社会状況や他のテキストを参照して考察した。この研究についての論文は近々発表予定としている。

(5) スウィンバーンについての研究を次の2つにおいて行った。ひとつは、スウィンバーンの詩の先駆性を、ロマン主義思想の発展として捉えたものである。スウィンバーンは従来、その官能的側面のみが評価されている。しかしながら、個人主義思想を実存主義的なものに高めている点を再評価し、考究した。スウィンバーンの主要作品(*Laus Veneris*, *The Triumph of Time*, *Itylus*, *Anactoria*, *Hymn to Proserpine*, *Hermaphroditus*, “*Faustine*,” “*The Leper*,” *Dolores*, *The Garden of Proserpine*, *Sapphics*, *Dedication 1865*, *Hertha*, “*Before the Crucifix*,” *A Forsaken Garden*, *Ave atque Vale*,

On the Cliffs, By the North Sea, "To a Seamew," Neap-Tide, A Nympholept, The Lake of Gaube, Atalanta in Calydon, Tristram of Lyonesse など) を網羅的に研究して、スウィンバーンの実存主義的傾向が人間中心的世界観のもとにどのように展開されているのかを論じた。(2 番の論文となった。)

これとは別に、海辺を描いた後期作品 (*On the Cliffs* と *By the North Sea*) について、研究発表を行った。ロマン派を変容させたり、回避したりするヴィクトリア朝詩人達の中にあつて、スウィンバーンが最も純粋な形でロマン主義思想を発展させていることを、サッフォーと海を中心とした転生思想を巡って論じた。この発表は論文としてまとめている最中であり、近々発表される予定である。

(6) 計画に挙げた最後の詩人、ダンテ・ガブリエル・ロセッティについて、その縮小したロマン主義の世界を、多くの代表作 ("The Blessed Damozel," "Sister Helen," "Stratton Water," "The Staff and the Scrip," "Eden Bower," "Love's Nocturne," "The Stream's Secret," "Jenny," "The Portrait," "A Last Confession," "The Bride's Prelude," *The House of Life*, "Rose Mary," "The Cloud Confines," *The New Life, Hand and Soul, The Orchard Pit, The Doom of the Sirens* など) について分析することで考察した。ロセッティの詩的世界は、ある意味、判断停止の価値観を常に有している。この特徴に関して、詩人のロマン主義的傾向と、それに対して異なるベクトルを持つ審美主義的傾向とについてそれぞれ調べることで、規模縮小による、ロマン主義の継承という負担からの回避を結論付けた。この回避は、20 世紀以降の詩についても受け継がれる傾向となっていることも示唆した。この研究成果は論文として現在まとめているところである。

(7) ロマン派の影響はヴィクトリア朝散文家にも及んでいる。過去に行ったラスキンの研究について、もう一度ロマン派の影響について再考した。さらにそのロマン派思想を受け継ぐ思想家ラスキンが同時代の小説家ジョージ・エリオットにどのような影響を与えているかを詳細に考察した。つまり、ロマン派の影響がどのように二重にヴィクトリア朝小説に影響を与えたかについての研究である。結論として、エリオットの小説『ミドルマーチ』において、ラスキンの美学と社会学とが、巧みに織り交ぜられ、作品の基調を成していることを論じた。この研究は、いわば、主たる研究であるヴィクトリア朝詩人研究の副産物である。(1 番の論文となった。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

1. Kei Nijibayashi, "Dorothea Brooke's Political Economy: Romanticism and the Influence of John Ruskin on George Eliot's *Middlemarch*" 2015 年 4 月 *Journal of Language, Literature and Culture*, Vol. 62, No. 1, pp 19-31 査読有
2. Kei Nijibayashi, "Swinburne's Existential Individualism: His Poetry and Aesthetics in Relation to Romanticism and its Legacies" 2015 年 3 月 『九州工業大学研究報告』 *Bulletin of the Kyushu Institute of Technology*, No. 63, pp.13-39 査読無
3. Kei Nijibayashi, "Browning's Dilemma in Romantic Inheritance: Dramatic Monologue and the Sense of Poetic Career" 2014 年 10 月 『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』2 巻、1 号、pp. 1-18 査読有(九州地区国立大学の同学術誌が紀要論文等を査読し、加筆修正の後、別論文として掲載したもの) <https://nuk.repo.nii.ac.jp/>
4. Kei Nijibayashi, "Browning's Dilemma in Romantic Inheritance: Dramatic Monologue and the Sense of Poetic Career" 2014 年 3 月 『九州工業大学研究報告』 *Bulletin of the Kyushu Institute of Technology*, No. 62, pp.47-67 査読無
5. Kei Nijibayashi, "Establishing Careers in the Imaginary: Misfortune, Madness and Posthumous Ambition of Romantic Poets" 2012 年 10 月 『教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集』6 巻、1 号、pp.1-18 査読有(九州地区国立大学の同学術誌が紀要論文等を査読し、加筆修正の後、別論文として掲載したもの) <https://nuk.repo.nii.ac.jp/>
6. Kei Nijibayashi, "Establishing Careers in the Imaginary: Misfortune, Madness and Posthumous Ambition of Romantic Poets" 2012 年 3 月 『九州工業大学研究報告』 *Bulletin of the Kyushu Institute of Technology*, No. 60, pp.13-30 査読無
7. Kei Nijibayashi, "Some Patterns in Morris's Romantic Reformation: A Study of His Late Romances" 2011 年 1 月 『九州英文学研究』 *Kyushu Studies in English Literature*, 27 号、pp.43-58 査読有
8. Kei Nijibayashi, "Similar Minds: A Study on William Morris's Poetic Development under John Keats's Influence" 2010 年 9 月 『教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集』4 巻、1 号、pp.1-18 査読有(九州地区国立大学の同学術誌が紀要論文等を査読し、加筆修正の後、別論文として掲載したもの) <https://nuk.repo.nii.ac.jp/>

[学会発表](計 1 件)

1. 虹林 慶、「スウィンバーンの後期作品を読む 海辺と境界」、日本英文学会九州支部大会、2014年10月26日、福岡女子大学(福岡市)(招待発表)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

虹林 慶 (Nijibayashi Kei) 九州工業大学
大学院工学研究院 教授

研究者番号：40315164